報告用紙②

関西学院大学　研究成果報告

2026年３月２５日

関西学院大学 学長殿

所属：社会学部
職名：教授
氏名：H.リーダーバッハ

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒特別研究期間　　☐自由研究期間 ☐大学共同研究　　☐個人特別研究費 ☐博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	和辻倫理学におけるヘーゲル哲学の受容
研究実施場所	日本
研究期間	2025年4月1日　～　2026年3月31日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要　**(2,500字程度)**

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究プロジェクトは、「京都学派とハイデガー」という支配的な研究パラダイムを問い直し、「京都学派とドイツ観念論」というパラダイムによってそれを補完することを目的として設定された。この課題は、和辻哲郎の倫理思想を事例として、とりわけ彼のヘーゲル受容に着目しながら遂行されたものである。プロジェクトの背景、すなわち「世界諸哲学（World Philosophies）」という比較的新しい現象について反省的に考察するにあたり、非西洋哲学の承認をめぐる諸要求を批判的に検討する必要が生じた。
承認の問題については、講演「グローバルな規模における日本哲学：世界哲学と承認の問い（Japanese Philosophy on a Global Scale: World Philosophies and the Question of Recognition）」において論じた。そこでは具体的な事例を通じて、トーマス・カスリス、ロルフ・エルバーフェルト、ブレット・デイヴィスが代表する、現在最も影響力を持つ非西洋思想の承認要求が、主として政治的な論拠を展開していることを示した。これらは、承認を被ってきた周縁化および差別への補償として理解するという点において、脱植民地主義的言説の系譜に連なる。こうした要求の背後にある動機は道義的には理解しうるものであるが、哲学的観点からは結局のところ不十分なものにとどまらざるをえない。政治の領域とは異なり、哲学においては承認への法的権利というものは存在しない。ある哲学的立場が承認に値することは、現在関連性を持つ問題や理論との地平融合

（fusion of horizons）の成功によって示されなければならない。この文脈において、和辻の「風土」論が現在の人新世（Anthropocene）問題を哲学的に理解する上で重要な意義を持つという論点を提示した。
和辻の思想が地平融合を果たしうるもう一つの問題が、いわゆる反デカルト主義である。反デカルト主義はまた、「京都学派とハイデガー」という確立した研究パラダイムにとっても特殊な意義を有する。雑誌『日本哲学史研究』（京都大学日本哲学史研究室編）への寄稿論文において、このパラダイムを批判的に検討し、和辻のヘーゲル受容と対照させた。論証できたのは以下の点である。すなわち、ヘーゲルは和辻の関係論的思考を理解するうえで不可欠であること、さらにヘーゲルを考慮に入れることで、和辻の思想を客観的精神の哲学の変奏として再構成する可能性が開かれること、そしてその結果として、確立した研究パラダイムでは主題化しえなかった和辻の倫理思想における問題群が可視化されること、である。なかでも注目すべきは規範性（normativity）、否定性（negativity）、絶対者（the absolute）といった問題である。
和辻のヘーゲル解釈については、講演「倫理的生活における和辻とヘーゲル（Watsuji and Hegel on Ethical Life）」においてより詳細に展開した。和辻の『倫理学』とヘーゲルの『エンチュクロペディー』および『法哲学』の該当箇所を並行的に読解することで、和辻の倫理思想を客観的精神の哲学の変奏として理解することが、その評価において有意義であることを示しえた。ここでも再び、和辻における規範性問題のdesideratumが浮上する。
他方、和辻が人新世の時代におけるヘーゲルの客観的精神の哲学を刷新する契機を提供しうるという論点は、講演「和辻、ディープ・エコロジー、そして人新世（Watsuji, Deep Ecology, and the Anthropocene）」の主題をなす。出発点は、主観と客観の対立という想定に基づく従来の存在論が人新世の哲学的考察に対して不十分であるという診断である。この診断に対してはジェデダイア・パーディが決定的な示唆を与えている。また一方でサイモン・ラムズデンは、ヘーゲルの自然哲学もまた人新世においてその限界に達することを指摘している。こうした問題状況において、和辻の「風土」論は、「ディープ・エコロジー」運動の論者たちが指摘する人間と自然の間の存在論的断絶を存在論的次元において架橋し、人新世問題への哲学的展望を切り開く可能性を持つ。
論文「布置状況における解釈学」では、上述した承認問題と地平融合についてより一般的な考察を展開した。ヴァルター・ベンヤミンの翻訳理論および歴史哲学を手がかりとして、「世界哲学」の台頭によって特徴づけられる現代という解釈学的布置状況（hermeneutical constellation）の概念を適用しうることを示した。この論文のきっかけとなったのは牧野英二の著書「京都学派とディルタイ哲学」であり、同書の書評は『日本哲学史研究』に掲載された。
なお、本研究プロジェクトの成果は、筆者が編者を務める論集『哲学コンパニオン：和辻哲郎（Tetsugaku Companion to Watsuji Tetsurō）』（New York：Springer）に貢献した論文及び序論に結実しており、同書は2027年2月刊行予定である。

以　上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内
※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内　博士研究員：期間終了まで
提出先：研究推進社会連携機構（NUC）
※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。
◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。